

ヘーゲル論理学と『資本論』の方法

平野 喜一郎

はじめに この論稿の4つの課題

- I ヘーゲル論理学の基本思想と方法論
 - II マルクス『資本論』の方法
 - III ヘーゲルとマルクスとの差違
- おわりに 4つの課題への一定の回答

はじめに この論稿の4つの課題

この論稿を書くきっかけになったのは、最近、あらためて角田修一氏の著書『「資本」の方法とヘーゲル論理学』（2005）を読み直したことである。この著書が出版された時に、私は書評（『経済』2006、3月号）¹⁾を書いた。この書評に、私の理解した角田氏の問題意識と内容を紹介した。それはほぼ私の問題意識と同じである。「ヘーゲル哲学をしっかりと、しかも批判的に学ばずに、マルクスの方法を理解することはできない」、これが角田氏の基本的な主張である。この主張にもとづいて、永年の『経済学批判要綱』（以下、『要綱』と略す）研究が生かされた、充実した内容になっている。

1960年代、見田石介先生のゼミナールで学んだ私は、以前に同じテーマで、『経済学と弁証法』（1977、大月書店）を書いた。今も、基本的な考え方は変わらないけれども、この間の研究をふまえて新に執筆するのを感じていた。角田氏とともに、ヘーゲル論理学研究会、関西唯物論研究会、経済学研究会に参加し、ヘーゲルとマルクスについて学んできた。この成果を生かし、これまであまり重視していなかった課題にも挑戦しようと思った。課題というのは次の4つである。

① 有論・本質論・概念論の弁証法と普遍・特殊・個別の弁証法との関係である。論理学は全3部作、『資本論』も全3部作だから、ヘーゲルとマルクスといえば、論理学と『資本論』の大項目どうしを対応させるのは順当におもわれるだろう。武市説や梯説が登場するのには理由があると思われる。他方で、見田石介氏は『要綱』に注目していたので、マルクスの普遍・特殊・個別を重視した。論理学の『資本論』への適応という場合に、論理学のどの個所を生かすのか、ということが問題になる。

② そのことと関連して、普遍・特殊・個別を『資本論』に対応させる場合には次の疑問が生じるかもしれない。ヘーゲル論理学全体の体系的カテゴリーである有・本質・概念と、部分のカテゴリーである普遍・特殊・個別とは、対等な関係なのか、いわゆる格が違うのではないか、という疑問である。

③ 普遍・特殊・個別を採用した場合、次のような選択をせまられる。『資本論』に普編・特殊・個別の弁証法がどのように適用されているか、という問題である。『要綱』には、たしかに第一部＝普遍、第二部＝特殊、第三部＝個別となっている。しかしそれは当初のプランであって、現行の『資本論』がプランどおり実現しているのだろうか。私は、現行『資本論』は第一部＝普遍、第二部＝個別のつながり、第三部＝特殊、と考えてきた。『資本論』の第一部＝普遍は当然で異論はない。問題は、第二部＝個別のつながり、第三部＝特殊と考えるか、あるいは第二部＝個別、第三部＝特殊と考えるかである。

④ 「肯定的理解のうち否定の理解を含む」（『資本論』第2版後書き）というのがマルクスの基本的な弁証法観である。そこから見て、ヘーゲルの普遍・特殊・個別の弁証法はもっぱら肯定的に理解された弁証法である。マルクスがこの弁証法を用いた場合でも、資本の肯定的側面、資本の強さを述べているのである。他方、ヘーゲルの有論・本質論・概念論の弁証法においても肯定的理解のみではない。有論には、有るものが無くなり、他のものに移行するという否定の理解がある。しかし、本質論、さらに概念論へすすむと弁証法は基本的に肯定的理解におおわれていく。認識が深まるごとに、ラジカルな弁証法が保守的な弁証法に変身していくのである。そこで、ヘーゲルの隠された否定の理解の弁証法を探し出すこと、さらに、ヘーゲルにはないマルクスの否定の弁証法を明らかにしヘーゲルと対置することが課題となる。

以上、4つの課題を考えるためには、そのまえに、ヘーゲル論理学の全体を見渡しておかねばならない。そのことによって、マルクスがヘーゲルから受け継いだものはなにか、が明らかになるだろう。さらにまた、マルクスの弁証法がヘーゲルのそれと異なるところはなにか、についても明らかになるだろう。

I ヘーゲル論理学の基本思想と方法論

大切なことはヘーゲルの基本思想を明らかにし、それを『資本論』の方法として生かすことである。「理念は本質的に過程であり、絶対的な否定であり、したがって弁証法的なものです。」(p. 231) 理念＝認識はプロセスである、これが論理学の根本思想である。ヘーゲルは個々の命題や概念をなんらかの順序でならべるだけではなく、それらが登場する必然性をあきらかにするとともに、それらの制限性をもあきらかにする。つまり、肯定のうち否定をみることによって、より内容豊かな命題や理念に発展させているのである。この点ではマルクスもまた同じ考えである。

認識はプロセスだ、これがなによりもマルクスが継承したヘーゲルの精神である。いうまでもなく、資本とは何かを明らかにすることが、『資本論』の課題である。ところが、マルクスは、資本とは何々であるというような定義をあたえていない。全三部をつうじて展開し、全体のプロセスをつうじて、資本とは何であるかを叙述している²⁾。

マルクスは資本についても、また貨幣についても定義はしていない。論理的な叙述過程のなかで展開することによってそれらの概念を明らかにしているのである。

このような視点から、Iでは、ヘーゲル論理学の展開過程、その基本的な流れを見ていきたい。

そのまえに、本稿がテキストとするヘーゲル『論理学講義 ベルリン大学1831年』の意義とその背景、かれの生きた時代と社会などについて述べておきたい。

1 ベルリン大学講義の意義

ここでとりあげるヘーゲルの論理学は、『論理学講義 ベルリン大学1831年』（牧野広義、上田浩、伊藤信也訳 文理閣 2010）である。この著書はヘーゲルが死（1831年の11月14日）の直前の4月下旬から8月21日にかけておこなわれた講義である。筆記者は長男のカール・ヘーゲルである。従来、広くつかわれてきたテキストは、ハイデルベルク時代の『エンチクロペディ』（初版 1817年）のうちの「論理学」である。これは『小論理学』（松村一人訳、岩波文庫）とよばれているものである。「小」とよばれる理由は、ヘーゲル自筆の大著『大論理学』（初版 1812-16年）にくらべてである。これはニュルンベルク時代に書かれた独立した著書である。全集版『小論理学』（1839年）にはヘーゲル自身の手になる本文と、編者のヘンニング筆記ノートと他の聴講者の筆記録が補遺として収録されている。従来から本文は分かりにくいと補遺はよくわかるといわれてきた。それには理由がある。まず、本文は口頭説明を前提とした講義テキストとしてヘーゲルが書いたことである。「小」になったのは、そのためでもあって、少量のテキストを講義によって補おうとした。『小論理学』の本文は、『大論理学』同様、体系にこだわったヘーゲルが、いわゆる正・反・合といわれる形式に論理を押し込めることになった。方法が体系の犠牲にされたのである。そして、その体系は絶対的真理で終わらなければならず、概念の展開はその絶対的真理にむかっただのプロセスに他ならなかったのである。

そのためにヘーゲルは無理なこじつけをしばしばおこなっている。たとえば有論冒頭の有・無・成について、そうとうの無理をして有から無へ展開し、さらにそこから成へ展開しようとしている。実際には認識の深まりのことであるのに、彼はこれを概念の自己運動にしなければ気がすまなかった。そしてこの概念の発展は、叙述の展開であるとともに、客観的事物の発展でもあれば、認識の発展でもある。つまり3つの発展を同時にあらわしているのである。それは彼の客観的観念論からくる結果なのであるが、これでは分かりにくいのも当然である。

さらに、ヘーゲルの観念論と無理な体系化とが合わさると、とんでもない荒唐無稽な論理展開となる。たとえば、概念論における主観から客観への移行である。概念論は〈A 主観的概念〉、〈B 客観〉、〈C 理念〉から構成されている。この構成自体は理念=真理は主観と客観の一致であるという、きわめて正しい真理観を述べているのである。ところが『大論理学』では、未分化な潜在的に存在していた主観が外に現れ顕在化したものが客観だということになる。自己自身を完全に展開し実現していないという意味での抽象的な主観的概念が、それ自身で自己を展開して客観になる、というような無理な展開をするのである。

ところが『小論理学』の補遺では、学生に話した講義内容であるため、無理な論理展開は少ない。具体的な事例も多くあってわかりやすいのである。

「ベルリン大学 1831」の講義は、『エンチクロペディ』の「論理学」をテキストとしておこなわれたのであるが、このテキストにはヘーゲルの手になる本文は収められていない。講義内容のみを収めてあるので、わかりやすいのである。もちろんヘーゲル自身の手になるものではないから、不正確なところがあるのは当然である。そのことを割引しても、ベルリン大学講義はなおへ

ヘーゲルの真意を述べたものとして高く評価できる。こじつけや観念論が少ないので分かりやすいのである。

2 ヘーゲルの生きた時代と社会

ここで、なぜヘーゲルが講義では当時の学生にも、今日の我々にも理解のできる内容を語りながら、著書においては難解晦渋の体系をつくりあげたか、を考えてみたい。

ヘーゲルは青年時代、フランス革命に遭遇した。かれは仲間とともに「自由の木」の周りをめぐって革命を称えた、といわれている。フランス革命への支持は生涯変わらず、毎年、7月14日には「バスチュューユの奪取を祝って」学生たちと祝杯をあげていた³⁾。最後のベルリン時代にも、彼はプロイセン政府から弾圧された愛国的な学生組合ブルシェンシャフト活動家のために、「圧制に苦しむ者の弁護人」⁴⁾として、尽力を惜しまなかった。このことはかれの思想を語るばあいには特筆すべきである。最初は革命に賛同しながらも、ロベスピエールの独裁や処刑を知ると、フランス革命全体に背を向けた同時代人、たとえばシラーのような文学者や思想家も多かったのである⁵⁾。

ナポレオンの敗退後、ヨーロッパはメッテルニヒ体制のもとで反動の時代となった。それは1830年の7月革命まで続いた。諸侯に支配された小国に分裂していたドイツの場合はそれだけではなかった。ベルリンを首都としたプロイセンの状況は学問や文化にとってもっと悲惨であった。

1915年から1931年のあいだヘーゲル哲学はドイツの精神生活を支配し、プロイセン国家の哲学に祭り上げられていた。しかし、プロイセン国家はこの哲学の革命的弁証法を理解することができなかった。それは、のちに「革命の代数学」（ゲルツェン）といわれたラジカルな内容を官憲から隠す難解な体系のせいであった。（同じ例は、戦前の日本革命の基礎理論となる山田盛太郎『日本資本主義分析』の難解な文体。）その革命的本質が明らかにされたのはフランスの7月革命の影響がドイツにもおよんだ1830年代になってからである。

ヘーゲル論理学の論理の移行・発展・展開は、彼によって書かれたものだけを見てはわからない。ヘーゲルは自分の生きた時代の現実から学びながら、それを書くときには慎重であった。それが彼の文章を難解にした大きな理由だとおもわれる。ヘーゲルの弁証法はなによりも、その時代、フランス革命による旧体制の崩壊、ナポレオンの台頭と没落、という社会激変の時代の反映である。カントが宇宙の研究によって自然の発展法則を見たように、ヘーゲルは歴史の研究から社会に発展法則を見ようとしたのである。しかし、当時の社会状況と彼の置かれた位置から、彼と同時代のフランス啓蒙主義者のように大胆には書けなかった。他方、講義では、しばしば説明の例証として現実の問題がでてくる。また、かなり率直に自らの進歩的の信念を語っている。

3 ヘーゲル論理学の体系と内容

まず、ヘーゲル論理学講義の体系を見ておきたい。ただし本稿で論じるカテゴリーにかぎり、そうでないものは省略する。

論理学への序論

第1部 有 Die Lehre vom Sein

A 質 Qualität

- a 有 Sein (有 Sein, 無 Nichts, 成 Werden)
- b 定有 Dasein
- c 向自有 Fürsichsein

B 量 Quantität

C 限度 Das Maß

第2部 本質 Die Lehre vom Wesen

A 現存在の根拠としての本質 Das Wesen als Grund der Existenz

B 現象 Die Erscheinung

C 現実性 Die Wirklichkeit

第3部 概念 Die Lehre von Begriff

A 主観的概念 Der subjective Begriff

- a 概念そのもの Der Begriff als solcher (普遍 Allgemeinheit 特殊 Besonderheit 個別 Einzelheit)
- b 判断 Das Urteil
- c 推理 Der Schluß

B 客観 Das Objekt

C 理念 Die Idee

- a 生命 Das Leben
- b 認識 Das Erkennen
- c 絶対的理念 Die absolute Idee

4 序論の意義

さて、「ベルリン講義」の特徴は、「エンチクロペディ版」の『小論理学』の「予備概念」にくらべて、それに相当する「序論」が相当に長いことである。

序論の冒頭では、論理学の対象について述べられている。「私たちの学問は思考を、すなわち純粋な理念を対象とします。思考は理念や思想がその真理において現れる地盤です。」(p.3)『小論理学』の「予備概念」の冒頭では「論理学は純粋な理念にかんする学、いいかえれば、思惟の抽象的な領域にある理念にかんする学」(全集 p.95)となっている。

ここでヘーゲルはプラトンやアリストテレスの哲学からはじめて、デカルト、カント、フィヒテの思想を論述している。ヘーゲルが哲学史のなかでの自分の位置をあきらかにしているのである。自説を唐突にもちだすのではなく、発展過程のなかに位置付けるというのは、まさに弁証法である。ヘーゲルは、抽象的カテゴリーから具体的な概念への展開を順序だてて叙述した。そしてこの叙述の展開の順序を哲学の歴史の順序に照応させた。哲学は客観性に対する態度にあるとして、客観性にたいする思考の3つの態度をあげている。第一の態度は形而上学で、カント以前の存在論としてのアリストテレスである。第2の態度はロックやヒュームの経験論とカントの批判哲学であり、そして、第3の態度としてヘーゲル自身の立場である直接知である。第一の素朴な直接知が論争的な批判哲学をへて、より高い段階の直接知に帰還した、というのである。

5 有・本質・概念の弁証法

ベルリン講義の構成は『小論理学』と同じで、第1部が有、第2部が本質、第3部が概念である。有論は、全体として、量の変化が質の変化になるという弁証法である。このような革命的な弁証法が、互いに反映しあう本質論では相互関係という調和的な関係になる。本質論は、表面の現象のうちにある本質をとらえる認識である。ここでは事物と事物との内的な関連がとらえられている。概念論では、有の運動と変化が本質段階をへて、内的な発展と有機性とがとらえられている。しかし、概念では、主体の一貫した成長発展であり、有の場合のように有るものが他のものに移行するわけではない。弁証法は有論においては他者への移行であり、本質論においては相互関係という意味での^(注)反照である。さらに、概念論の弁証法は理念＝認識という主体の発展である。したがって、有・本質・概念という論理学の叙述は認識の深まりの過程である。問題は、認識の深まる過程が、同時に革命的な弁証法が調和の弁証法に変わる過程でもある、ということである。反対に、マルクスにあっては、認識の深まりは革命性の深まりと一致している。まさに、ラジカルであるということは問題を根底からとらえることであった。

《有論》 有論は世界をもっとも抽象的に、直接に意識に現れるものとして表面的にとらえる認識である。ここでは運動や変化が外面的にとらえられている。

何から始めるべきか、「始元はまったく直接的なもの——有です。」(p.105) 純粹な、ただ有るというのが有である。その有と無の統一が成である。「成は、動揺であり、運動ですが、同時に直接に消滅でもある動揺であり、運動です。」(p.110) 「無からは何もものも生じないという古い命題があります。しかし無は有に移行するだけであり、有は無に移行するだけです。……無の真理は、それが有であることにあります。……もしも、私たちが成において、まず有から始めて、無に移行し、次に無から有に移行するという区別を行なうならば、そこには生成と消滅という二つの規定があります。」(p.113) 「万物は流転する」といったヘラクレイトスは、自分の原理が火である、といったという。「火はまさに動揺であり、成であり、消滅です。」(p.114)

「成の中での有は無と一つになっています。……有と無の両者は消滅するものであり、成はまったく矛盾です。〔成は〕矛盾〔として〕まったく自己の中で崩壊します」(p.115) そこで成から定有へ移行する。定有は「規定された有であり、否定をともなった有であり、有と無とが静止した統一の中にあるものです。」(p.115)

有は定有をへて向自有、つまり自分自身であるものへ移行する。それは他に無関心な規定性であり、質に無関心なのは量だといって〔B 量〕に移行する。

有論は質と量が統一した限度という構成になっている。たとえば、椅子という質には、人が座れる大きさという一定の限度があり、大きすぎても小さすぎてもそれは椅子ではない。「すべての事物は限度です。古代人は『度をこすなかれ』といました。……限度を超えたものは没落させられます。」(p.146)

《本質論》 本質論は、本質、現象、現実性の3つに区分される。ここには、現実には本質と現象がある、現象だけに眼をうばわれずに、現象の奥に隠された本質を探れ、という科学の基本的

注 これまでの反省という訳は誤解されやすい。ヘーゲル全集版『大論理学』の訳者、真下信一は反照、反映とすべきだとしている。このほうが本質論の内容にふさわしい。

なお、真下訳では、有論は存在論となっているが、これは有論のほうが適切だと思う。

精神がのべられている。

〈A. 現存在の根拠としての本質〉では、対になった概念が反照しあっている。同一性と区別、差異と対立、肯定的なものと否定的なもの、全体と部分、外的なものと内的なもの、現実性と必然性などが考察される（後に見るように、これらのカテゴリーをマルクスは意識的に使用している）。なかでも、本質と現象の対立が基本である。本質と現象はあわさって現実性になる。現実というものは現象と本質から成っている。そこでは「有は仮象に引き下げられます」。(p. 150) 有論で見たものは仮象であって、その奥には隠された本質がある、という。本質と現象は固定したのではなく、本質は現象しなければならない。「現象することは本質の核心です。」(p. 169) 本質は一度現象すれば終わるというものではない。「本質は運動であり、過程です。」(p. 151) それは展開しつづけるプロセスである。

展開された現実性は必然性となる。つまり、現実性は可能性と統一して必然性になる、という。

必然性のなかには自由が即時的に含まれている。しかしこの段階での自由は、運命に敗れて没落する古代ギリシャの英雄たちの自由である。運命が「そのようなものであり、そのようなものであるがゆえに、我々はそれを受け入れる」(p. 183) という自由である。この段階では、運命＝必然性をそのまま認め受け入れるだけであった。しかし、人間は、必然性はそれが何であるか、認識しなければすまなくなる。

本質論の最後に出てくる、最高の概念は交互作用である。ここで考察されるのは必然性と自由である。自然のなかには必然性の領域があり、この必然への屈服は人間にとってもっともきびしいものである。しかしこの必然性を認識すれば人間は自由になる、とヘーゲルはいう。「必然性を思考することはこのもっとも厳しいものの解消であり、自由にすることです」(p. 192)。自分ではない他者の必然性を認識すれば自由だというのである。しかしこれだけでは、必然性にとどまっており本当の自由でないことはヘーゲルも気づいている。本質は必然性であるが、しかし概念は自由である。そこで本質論から概念論へ移っていく。

ヘーゲルの考える本当の自由については本質論の最後のところで、概念論への移行のところで述べられている。「概念は自由なものです。自由は一般に、他のものの中にありながら自分のもとにとどまることという抽象であり、他のものの中で自分自身と同一であることです。」(p. 190) 自由とは「他のものの中にありながら自分のもとにとどまること」(p. 190) である。

「概念は絶対的な自由であり、自分を自分自身から区別しながら、まったく自由なものにとどまるものです。」(p. 194) 他の中にあっても自分のもとにとどまる、これがほんとうの自由についてのヘーゲルの考えである。

他のものの中にあっても自分にとどまる、という認識は、後に考察する普遍・特殊・個別の同一性の内容をよくいいあらわしている。これは、ヘーゲル哲学の結論でもあり、その積極面でもあれば消極面でもある。ものごとがばらばらでなく、つながりがあり、しかも自分をつらぬいていく、という認識は積極的な意味をもつ。しかし、この認識はものごとを肯定的にだけとらえ、否定的にとらえないのである。肯定的理解はあっても、否定的理解がないのである。⁶⁾

《概念論》「概念は自由なもの」という言葉で概念論は始る。「ここにはもはや他者への移行はなく、もはや他者への映現はなく、……そうではなくて発展 (Entwicklung) があります。発展においては、各々のものが自分の中で一者の本性を自分の真理としてもちます。」(p. 196) 有論の

弁証法は他者への移行であり、本質論の弁証法は他者への映現であり、概念論の弁証法は発展である。

概念論は〈A 主観的概念〉、〈B 客観〉、〈C 理念〉からなる。この構成が意味するものは、主観と客観の統一が理念だということである。主観が客観を克服すること、主観的な認識が客観的世界を克服することによって理念=真理に到達するということである⁷⁾。先に述べたように、認識は過程である。本質論の場合のように認識は自分にとどまるだけでなく、発展するのである。

理念では「今や主観的なものと客観的なものとが統一されています。それは真理です。」(p. 230) これは、認識が客観的な現実を反映してこそ真理だ、というマルクスと同じ真理観である。客観的現実を無視して理論の整合性だけをもとめる経済学が多数存在するけれども、それらは真理ではなく虚偽である。だが、一度把握された真理もそこにとどまっていたは真理ではなくなる。「理念は本質的に主体です。実体は、真実なものに成るためには、主体として把握されなければなりません。」(p. 230-231) 客観と一致した理論であっても、固定された実体に止まっては、これもまた虚偽に転じる。たえず現実と格闘し、現実を克服する主体でなければならない。

ここでヘーゲルは認識だけを論じているのではない。合目的活動である労働のことも思いうかべている。「目的は自分に直接性の形態を与えるもの」であり、「矛盾を止揚する事は活動です」。理念においては目的、手段、素材、達成された目的が同一のものになっている。そこで労働が素材と生産手段をつかい果たし、新しい使用価値をつくりだす。「客観を用いて別の客観である何らかの素材に向います。客観的なものが相互に出会います。これは理性の狡知 (List) であり、目的です。手段はつかい果たされます。」(p. 229)

理念は〈a 生命〉、〈b 認識〉、〈c 絶対的理念〉から成なる。理念において「主観的なものと客観的なものとが統一されています。それは真理です。」(Ibid.)

6 普遍・特殊・個別の弁証法

主観的概念は、〈1. 概念そのもの〉、〈2. 判断〉、〈3. 推理〉の3つからなる⁸⁾。

そしてこの〈1. 概念そのもの〉が第1の普遍性、第2の特殊性、第3の個別性から構成されている。ヘーゲルにおいては普遍・特殊・個別は〈概念そのもの〉の3つのモメントであるけれども、実は同じ一つ概念である。普遍は個別でありまた特殊であり、三者は同一である、というのが彼の基本的な主張である。

普遍性は形のうえでは有や同一性と同じだが、そのような抽象的な内容ではない。「普遍性は、同一性でありながら、この規定性の中での自己との統一として定立されています。」(p. 198) 普遍は実り豊かなものであり、すべての特殊なものを包んでいる。「普遍的なものは特殊なものを自分の外にもつのではなく、自分の中に特殊なものを含みます。」「特殊性もまた〔自分の中に普遍性〕をもち、種 (Art) は自分の中に類 (Gattung) を含みます。」(p. 198) 種はまた個別性を自分の中に含んでいる。「個別的なものはさらに主体 (Subjekt) として表現されることができます。」(p. 198) ここで、個別が主体的だという指摘は重要である。

普遍はしばしばたんなる共通性だと理解される。特殊性を除去して残ったものが普遍だというのは、悟性の理解の仕方である。ヘーゲルは、たんなる共通性と真の普遍性との違いは、『社会契約論』のうちに見事にいいあらわされていると、ルソーを高く評価している。一般 (普遍) と

特殊についてのルソーのとらえ方を、「普遍的意思とはすなわち意思の概念であり、もろもろの法律はこの概念にもとづいている意思の特殊規定である」（文庫下 p.130）と、ヘーゲル自身の言葉で表現し、賛同している。かれは、ルソーが常にこの区別を念頭においていたら、もっと深い業績を残しただろう、とも述べている。⁹⁾

概念は特殊性に定立されて判断にうつる。悟性的・形式的判断では、別々のものを結合することだ、と考えられている。「この花は赤い」という場合、花と赤とをイコールで結合することで判断が成立するというのである。弁証法的な判断ではこのような形式論理的な判断が批判され、概念が特殊化したものが判断である。すなわち、概念にすでに含まれていたものが、概念が発展することによって定立される。外から赤を加えるのではなく、花自身がもともと持っていた規定が発展し定立したのである。

概念は開示されて推理となる。悟性的推理は、主語が媒介をつうじて自分とは別な規定と結合されることである。「この花は赤い」というとき「赤は色である」、「ゆえにこの花は色をもつ」という三段論法である。無関係な外的関係にあるものを、抽象的な中間項をつないでいるにすぎない。弁証法的な推理は媒介をつうじて自己を自分自身と結合することである。

推理の三つの規定である普遍・特殊・個別¹⁰⁾の関係についても同じである。「個別と普遍の両側面がばらばらに存在すると見なされるならば、理性は悟性へと引き下げられます。この推理は外面的な推理です。」(p.212) 悟性の場合、個別は特殊であり、特殊は個別である。ゆえに個別は普遍である、という悟性的推理である。¹¹⁾¹²⁾

それにかわって弁証法的推理、普遍・特殊・個別の同一性へとすすんでいく。それは普遍と個別とが統一した必然性の推理によってである。

普遍・特殊・個別は同一であるが、当然違いがある。特殊と個別の違いはつぎのとおりである。特殊は他の特殊と必然的な関係があり、一方の個別は主要なもので、他の特殊を生み出すのにたいして、ある個別は他の個別とそのような関係にはない。特殊にくらべて個別は自立的、主体的、¹³⁾¹⁴⁾¹⁵⁾排他的だといっているだろう。

7 理念＝認識はプロセスである

概念論は〈A 主観的概念〉、〈B 客観〉、〈C 理念〉からなる。この構成によって、主観が客観に一致したものが理念＝真理だという正しい真理観をあらわしている。理念の最後は絶対的理念、つまり完全な真理でおわっている。それは認識が客観の反映をもとめて真理に近づいていくプロセスである。したがって、この章は真理にいたる認識発展のプロセスと読めばよいだろう。

C 理念の〈1. 認識そのものの〉で、ヘーゲルは、活動的な認識の最初の活動が分析的方法だという。「具体的なものは、分解されなければなりません。これが分析することであり、多様なものを分解することです。」(p.240) ここには、分析の内容と意義がただしく述べられている。

彼はいう。「分析することは分離することです。しかしそれはもともと一つにまとまったものをただ単離させることです。」(p.240) 特殊をひきだすのではなく、普遍を引き出すことが分析的方法である。外面的なものに普遍の形式を与えることが分析なのである。ヘーゲルの方法は最初から最後まですべてが弁証法だと誤解されている。だが、彼は分析の意義を理解し、それを最初の活動として正しく位置付け、次にくるものは総合的方法だといっている。

分析とは反対の方向に進むプロセスが総合である。「さらに次のものは総合的方法です。分析の方法は普遍である類に到達します。総合的方法は普遍から、つまり分析の結果から始めて、分析が捨て去った特殊に進みます。」(p. 241) 非弁証法的な分析と総合の意義をしっかりと認めているのである。なお普遍から特殊へすすむ総合的方法のほかに、普遍から個別へすすむ総合がある。「概念は普遍性から出発して、個別化へと進みます。」(p. 242)

〈a. 認識そのもの〉は〈b. 意思〉を経て〈c. 絶対理念〉に到達する。「主観的理念によって客観的世界が認識されます。」「絶対的理念は、主観的理念と客観的理念との統一として、理念の概念です。」(p. 246) ここでも理念すなわち真理は主観と客観の統一である、という正しい真理観がのべられている。しかも、真理はここにとどまることなく、先へ進んでいくプロセスである。「ここに真理の中心がある、と思われるかもしれませんが。しかし絶対的理念は終りであるとともに、絶対的な始まりです。」(p. 247)

最後に、ヘーゲルは方法の重要性を強調しておわる。「方法は魂であり、素材そのものの生きた活動です。しかし、その活動を方法として知ることが本質的なことです。」(p. 251)

ヘーゲル論理学の結論が方法であることは、高く評価できる。しかも分析的方法と弁証的方法とははっきり区別し、両者の方向が反対であることも指摘している。しかし、方法が魂だ、素材の活動だ、というとき、ヘーゲルの欠点があからさまになってくる。方法は分析過程と総合過程とにある認識作用であるが、方法という認識は客観的な対象や素材には存在しない。認識は分析するが、客観は分析しないのである。この点が、マルクスと決定的に異なるところである。客観的な存在と主観的な認識を同一視してはならないのである。

II マルクス『資本論』の方法

ここでは、ヘーゲル論理学が『資本論』でどのように生かされているかを明らかにしたい。

マルクスの方法で重要なことは、研究の仕方と叙述の仕方がはっきりと区別されていることである。第2版後記には次のように書かれている。

「もちろん、叙述の仕方は、形式としては、研究の仕方と区別されなければならない。研究は、素材を詳細にわがものとし、素材のさまざまな発展形態を分析し、それらの発展形態の内的紐帯をさぐり出さなければならない。この仕事を仕上げのちに、はじめて、現実の運動をそれにふさわしく叙述することができる。これが成功して、素材の生命が観念的に反映されれば、まるで“先験的な”構成とかかわりあっているかのように、思われるかもしれない。」(① p. 27)

ここに、マルクスとヘーゲルとの差異、ヘーゲルの混同がはっきりのべられている。ヘーゲルはせっかく分析的方法と総合的方法を区別しながら、結局は、分析的な研究方法と総合的な叙述方法と、さらには客観的な対象とを混同してしまった。そのためヘーゲルは分析の意義をいいながら、実際には分析を十分に使っていないのである。一方、ここでもマルクスは徹底して分析をおこなった。研究と叙述と客観的对象、この3つがはっきり区別されているのである。

1 研究方法としての有・本質・概念の弁証法

感性から理性へ、ということばは日常用語としてもつかわれる。もうすこし厳密にいうところである。認識は感性的認識から始まり、悟性的認識にいたる。悟性的の方法は分析である。悟性的認識はさらに理性的認識へ進んでいく。ヘーゲルの『精神現象学』の叙述は大筋この展開にそ¹⁶⁾¹⁷⁾っている。

理性的認識は弁証法的認識である。第三の弁証法段階に達したうえで、弁証法のレベルで、感性・悟性・理性を繰り返した展開が有論・本質論・概念論である。論理学は異なるレベルで『精神現象学』と並行して展開している。すなわち、『精神現象学』の到達した理性段階から、論理学は感性・悟性・理性を弁証法の論理として、有・本質・概念を展開している。

『資本論』全体の展開は普遍・特殊・個別の方法によるが、商品論の方法は基本的に、感性・悟性・理性および有・本質・概念のプロセスをすすむ分析方法である。『資本論』は、商品という感性にあたえられた客観的事実からはじまる。その商品を悟性によって使用価値と価値とに分析し、価値を分析し、その本質が労働であることを見る。ここまでは悟性的認識である。そのうえで、なぜ労働が価値という形態をとるのか、を明らかにする。隠された本質を見たうえで、なぜ？ と問い、それに答えることによって弁証法的把握・概念的把握をしているのである。

経済学史のプロセスもまた感性・悟性・理性のプロセスをすすんできた。重商主義は商品流通という社会の経済現象を観察し、商業が価値を生むという学説をつくりあげた。表面だけにとらわれた重商主義の偏見を批判して、古典派経済学は社会の内部にかくされた本質を究明した。価値を生み出すものが労働であることを発見したのである。しかし古典派はなぜ労働が価値という現象形態をとるのか、を明らかにできなかった。商品社会・資本主義社会を永遠の存在と考え、その歴史性を見なかったからである。マルクスは古典派の成果をふまえ、どのようにして、なぜ、なにによって労働が価値になり、貨幣になるかを明らかにした。学問・科学の歴史における自己の位置を明らかにすることは弁証法の実践である。『剰余価値学説史』はそのためにも書かれたのである。

『資本論』第3部の最終篇である第7編「諸収入とその源泉」で、自己の位置付けという同じ課題を要約している。そこで、いわゆる「三位一体的範式」の批判から始め、重商主義にかわって俗流経済学を登場させる。俗流経済学が経済現象の表面だけを見て、仮象に欺かれながら、これを学説として記述したからである。「この偽りの外観と欺瞞、富のさまざまな社会的諸要素相互のこの自立化と骨化、この諸物件の人格化と生産諸関係の物件化、日常生活のこの宗教、これらを打ちこわしたことは、古典派経済学の大きな功績である」(13 p. 1453) 正しくも古典派は俗流経済学がつくりあげた偽りの外観にとらわれた欺瞞の経済学を打ちこわした。マルクスが古典派をこれほど評価したのは、かれらが、利潤・利子・地代という諸収入を利潤に還元し、利潤を事実上剰余価値に還元し、剰余価値を価値に、そして価値を労働にまで還元したからである。¹⁸⁾¹⁹⁾つまり現象から本質へ分析をすすめたからである。

しかしながら、古典派は、還元・分析とは逆の方向で、労働を価値に、価値を剰余価値に、剰余価値を利潤に、利潤を利子や地代に展開できなかった。本質から現象へ展開できなかったのである。つまり、悟性的・本質的把握はできても弁証法的・概念的把握はできなかった。マルクスは古典派よりもっと鋭く分析し、諸収入を平均利潤に、平均利潤を利潤に、利潤を剰余価値に、

剰余価値を価値に、価値を労働に還元した。古典派が事実上その存在を知りながら、はっきりと把握できなかった剰余価値の正体を正確につきとめた。ここまでは基本的に分析である。それだけではない、マルクスはここから、今来た道を逆に価値から地代までをたどる。彼は、価値がどのようにして剰余価値に転化するのかを明らかにした。さらに、剰余価値がどのようにして利潤に転化するのか、利潤がどのようにして平均利潤に転化するのか、平均利潤がどのようにして商業利潤や利潤に変身するのか、平均利潤以上の超過分から何によって地代が生じるのかを発生的に展開した。このばあい、概念的把握は、剰余価値という普遍が特殊へ展開していくプロセスでもある。概念的把握は普遍から特殊への展開と重なっている。

普遍・特殊・個別の方法にくらべて有・本質・概念の方法は『資本論』からは見えにくい。

それは有・本質・概念の方法は、二重に隠されているからである。まず、マルクスは経済学批判にくらべて『資本論』においては「方法はずっとはるかに隠されるだろう」（エンゲルスへの手紙 1861年12月9日）と書いている。したがって、次に述べる叙述の方法としての普遍・特殊・個別も隠されたのである。だが、この方法は叙述に使われているので、叙述そのものから読み取ることができる。しかし、研究方法で使われた有・本質・概念は、研究過程そのものが書かれていないのだから、これを解明することは、普遍・特殊・個別にくらべてはるかに困難である。

2 叙述方法としての普遍・特殊・個別

『資本論』全3巻を方法論の視点から大別すると、商品から始めて資本の概念に到達する段階（第一部 第一篇および第二篇）と、これを基礎にして、資本の概念を確定したうえで、その資本の内容と形態が、特殊と個別とに展開されていく段階がある。量的にはアンバランスであるが、方法からみるとこの二つの部分にわかれるのである。前段階は「資本がある一定の点でおかれているところの定まった形態を確定」する段階であり、後の段階は「この萌芽からの発展として考察すべき」段階である。（『要綱』Ⅱ 高木幸二郎訳 p.231）

前段階は価値・商品・貨幣などの諸範疇を確定していく「商品と貨幣」である。そこでは価値の分析過程が叙述されている。商品という現象を眼前において、これを使用価値と交換価値とに分析することから始る。さらに交換価値の分析によって、価値をとりだし、価値をつくる抽象的人間労働と、使用価値をつくる具体的有用労働とに分析する。分析によって価値を抽出し、さらにその本質が労働であることをつかんだうえで、こんどは本質からふたたび現象へとすすむ。労働がなぜ価値という姿をとるのか（物神性論）、商品がどのようにして貨幣が生じるか（価値形態論）、を展開している。

商品論は、有・本質・概念のプロセスをすすむ研究過程が同時に叙述の過程になっている。商品論は基本的に分析からはじまり分析におわる。普遍・特殊・個別は資本が登場する第二段階からということになる。

ところが、価値形態のところだけは、普遍・特殊・個別の方向を逆にした個別・特殊・普遍の弁証法がつかわれている。

『資本論』第1部、第1篇、〈第3節 価値形態または交換価値〉は「推理」のすぐれた例としてぴったりである。ほかでもなく、マルクスは価値形態論の叙述にヘーゲルの推理論を意識的に適用しているからである。推理の三項、個別・特殊・普遍において価値の貨幣への転化が証明さ

れる。

形態 a 簡単な、個別的な、偶然的な価値形態 リンネル=上着

形態 b 全体的な、または展開された価値形態

リンネル=上着, =茶, =コーヒー, =小麦, =金……

形態 c 一般的価値形態

上着	=	}	リンネル
茶	=		
コーヒー	=		
小麦	=		
金	=		
⋮			

この価値形態の展開において、等価形態の〈a 個別的等価物〉は、〈b 特殊的等価物〉、〈c 一般的（普遍的）等価物〉へと発展して行く。価値の概念は、個別・特殊・普遍という推理過程において明らかになる。この展開は目標なしにすすむのではない。この叙述に先立ってすでに研究がなされている。貨幣を前提にしてこの謎を説くために、叙述とは逆の方向に研究したのである。もちろん、研究過程はマルクスの頭のなかだけに存在して、書かれてはいない。

このように、基本的に分析が使われている商品論のなかにあつて、価値形態論では普遍・特殊・個別が駆使されている。しかも、この個所ではたまたま叙述が貨幣発生の実現の客観的な歴史のあゆみと一致している。そのため、価値形態論は、歴史の歩みと研究の過程と叙述の展開とが一体に成っているように見え、ヘーゲルの弁証法そのものだと考えられたこともあった。しかし、そのような歴史・研究・叙述の「三位一体」はマルクスのものではない。²⁰⁾

資本が登場すると、普遍・特殊・個別の弁証法どおりに資本が展開していく。しかしこのプロセスは、叙述の過程であっても研究の過程ではない。まして、資本発生の実現の客観的な歴史ではない。この個所を価値形態からの類推で、資本の歴史的生成の過程と見るのは誤りである。

3 叙述方法としての普遍・特殊・個別

マルクスは叙述の方法としては普遍・特殊・個別の弁証法をつかい、研究の方法としては有・本質・概念の方法にしたがっている。ただし、マルクスが方法という場合には叙述方法である。それは、当然のことで、読者が読むことができるのは、普遍・特殊・個別の方法を駆使した『資本論』の叙述である。研究過程はその前提であっても書かれてはいないので、この方法を考察するのはより困難である。その研究方法についてはすでに述べたとおりである。

そのことを前提にして、こんどは普遍・特殊・個別による叙述方法について述べ、その適用を考えたい。その際、主として『資本論』第3部をとりあげる。ここにおいてマルクスの方法がもっともあざやかに観察されるからである。もちろん、第1部、第2部は当然第3部の前提であるので、そのかぎりでもとりあげたい。

4 普遍から特殊へ

『資本論』は、第1部「資本の生産過程」、第2部「資本の流過程」、第3部「資本の総過程」とから成っている。

第1部は第2部・第3部に対しては普遍である。第1部そのものを見ると、その内部には普遍・特殊・個別の弁証法が縦横につかわれている。第1部では、普遍から特殊の弁証法は、可変資本から不変資本への移行、絶対的剰余価値の生産から相対的剰余価値の生産への移行、〈資本による剰余価値の生産〉から〈剰余価値による資本の生産〉などである。

第2部では、生産過程が普遍であり、流過程が特殊である。第2部の構成は、一見、生産過程と流過程とを合わせて総過程となるようにおもわれるが、そうではない。第1部は題名どおりであるが、第2部は生産過程から流過程への展開である。また第3部では産業資本から商業資本・利子生み資本・資本主義的土地所有への展開である。いずれも流過程だけでなく生産過程から流過程への展開であり、産業資本から商業資本などへの展開である。流過程においても総過程においても、まず、生産過程にある産業資本が普遍として登場し、そこから特殊と個別へとすすんでいる。そのことは方法論として重要である。

第1部・第3部における普遍から第3部の特殊へは、第1部の全体と第3部の前半〈産業資本と利潤〉から第4篇〈商業資本と商業利潤〉・第5編〈利子生み資本と利子〉・第6篇〈資本主義的土地所有と地代〉への展開である。

マルクスにおいては、普遍的と特殊との関係は、いわゆる学術書にみられる総論と各論のような関係ではない。総論的な資本一般という普遍的概念はないのである。産業資本でもない、商業資本でもない資本一般から、各論としての産業資本・商業資本へ、というのではないのである。普遍的な資本一般は、その特殊な概念である第一部「資本の生産過程」のなかで与えられている。産業資本はそれ自体は特殊な資本でありながら普遍的な資本である。生産過程もそれ自体は特殊な過程でありながら、普遍的な過程でもある。だから、「資本主義的生産過程」には流過程もふくまれているのである。流過程が特殊な過程であるのに対して、生産過程は普遍＝特殊な過程である。商業資本や利子生み資本が特殊な資本であるのにたいして、産業資本は普遍＝特殊な資本である。

5 普遍から個別へ

以上、普遍と特殊の関係を見たのであるが、つぎに、普遍と個別との関係を見よう。特殊は他の特殊にたいして必然的な関係にあり、主要な一方の特殊が他の特殊を生み出す。他方、個別は他の個別とそんなふかい関係にはなく自立している。

第2部は普遍と特殊の弁証法だけでなく、普遍と個別の弁証法がつかわれている。後者は、まず『資本論』第1部および第2部の第1編（資本の循環）と第2編（資本の回転）においてみられる。第1部で個別産業資本を分析しながら、同時に普遍的な産業資本一般を論じているのである。第8章〈労働時間〉で、マルクスは、工場監督官の報告書を分析している。L・ホーナーのような監督官が個々の工場で調査した事実である。個々の事実から、普遍的な剰余価値生産の法則を引き出している²¹⁾のである。数多くの工場主個々の行動には普遍性がある。（理論化に際しては特殊から普遍の場合もある。特殊な生産部門、レース製造業、製陶業、綿紡績業、パン製造業などから、やはり、

普遍的な法則をひきだしている。）

「第1部では、資本主義的生産過程が個別的過程として、さらにまた再生産過程として分析された——すなわち、剰余価値の生産と資本そのものの生産とが分析された。」(⑦ p. 557-8)

第2部の第1篇、第2篇も同様であり、個別産業資本が論じられている。

「第1篇でも第2篇でも、問題になったのは、いつも、ただ一つの個別資本であり、社会的資本の自立化された一部分の運動だけであった。」(⑦ p. 559)

ところが第3篇〈社会的総資本の再生産と流通〉にすすむと、そこでは普遍的資本から個別資本のからみ合いにすすんでいく。個別資本が他の個別資本とつながり、からみあって社会的総資本の再生産と流通へ移っていく。「しかし、個別諸資本の循環は、からみ合い、前提し合い、条件付け合っており、まさにこのからみ合いにおいて社会的総資本の運動を形成する。……いまや個別資本の変態が社会的資本の変態系列の一環として現れる」、「いまや、社会的総資本の構成部分としての個別的資本の流過程（この過程は、その総体において再生産過程の形態をなす）が、したがってこの社会的総資本の流過程が、考察されなければならない。」(Ivid)

個別資本が他の個別資本とつながり、からみあい、束になっているのが第3篇である。

第3部でも普遍と個別の弁証法は前提されている。まず第1部で明らかにされた剰余価値はここで利潤に転化する。本質の現象形態への転化である。次に利潤が平均利潤に転化するが、平均利潤は個別の資本が生み出す個別の利潤が多数存在することを前提とする。普遍的な資本が個別資本として集められている。このように普遍から、集められた個別への展開を前提にして、こんどは普遍的な産業資本から商業資本・利子生み資本などの特殊な資本へ転化するのである。

以上のように第2部でも第3部でも、普遍・特殊・個別の弁証法が縦横に使われているのである。しかも、第1部の普遍的＝特殊な産業資本から始っている。第一部は普遍といってよいが、第2部は特殊、第3部は個別、というように限定はできないのである。

Ⅲ ヘーゲルとマルクスとの差異

ここでは、ヘーゲルとマルクスとの差異を考察したい。

有・本質・概念の弁証法、普遍・特殊・個別の弁証法という思考方法においてヘーゲルとマルクスには共通性がある。しかし、いくつかの点で両者のあいだには大きな違いがある。とりわけ分析の使用と矛盾の捉え方とにおいてである。マルクスは資本制経済を徹底的に分析し、そこに解決できぬ矛盾を見た。彼は徹底した分析と革命的弁証法によって、ヘーゲルを超えたのである。

1 分析的方法が弁証法の基礎である

ヘーゲルは『小論理学』の本文では分析的方法について述べ、その意義をたかく評価している。「誰でも成の表象をもっており、また成が単一の表象であることを認めるであろう。さらに、その表象を分析してみれば、それが有という規定のみならず、その正反対の無という規定をも含んでいることを認めるであろう。」(全集 p. 272-273) これはマルクスの分析とおなじである。ヘーゲルも実際には、分析を使っているのである。ところが他方では、彼は、「有は無と同じものであ

る、したがって有ならびに無の真理は両者の統一であり、この統一が成である」(Ibid. p. 270) というような無理な展開をしている。実際に用いた分析を叙述によって裏切っているのである。講義には分析の記述はでてこないけれども、分析をおもに用いる経験論が高く評価されている。それまでの悪魔、奇跡、魔法そして迷信に経験論を対置してヘーゲルはいう。「今や、人々は自然とその法則を純粋にそれ自身として観測しようとしてきました。経験論の偉大な原理はそこから由来します。」(p. 36)

しかし、ヘーゲルの分析は徹底しない。概念の自己展開と無理な体系化とによって、実際には使用した分析も不徹底におわり、覆い隠されてしまうのである。他方、マルクスの分析は徹底している。

第1篇第1章で、マルクスはまず、商品を二つの要因、使用価値と価値とに分析した。ついで、商品に表わされる労働の二重性、具体的有用労働と抽象的人間労働とを分析した。そのうえで、今度は、分析を前提にして、なぜ労働という本質がそのまま現れないで、隠されてしまい、外見上違った姿をとって現れるのか、ということを解明する。どのようにして？ なぜ？ なにによって？ 労働が価値になるのか、価値が貨幣になるのかを明らかにしたのである。なぜ？ を問う物神性論は何か特異な神秘的な論理展開をすることではなく、分析を徹底することである。

ここには、神秘的な、理解不明な、難解な展開は何もない。徹底的な分析があるのみである。マルクスにあっては、弁証法を意識していても基本の方法は徹底的な分析である。弁証法の基礎には分析がある。『資本論』は全巻を通じて分析に始まり分析に終わる、といってもよいほどである。

2 和解する矛盾と否定の矛盾

ヘーゲルは矛盾をいいながら、けっきょくは対立するものを和解させてしまう。他方、マルクスの矛盾は和解できない矛盾、他を減ぼし自身をも減ぼす矛盾である。

さて、『資本論』第三部へ話をもどそう。そこで、最後には調和がもたらされるヘーゲルの矛盾とは異なるマルクスの矛盾をみることができる。

マルクスの弁証法は「現存するものの肯定的理解のうちに、同時にまた、その否定、その必然的没落の理解を含む」(① p. 29) 革命的な弁証法である。これまで見てきた普遍・特殊・個別の弁証法は基本的に肯定的理解による弁証法であった。産業資本が他のものの中にありながら、すなわち、流通過程においても、商業部門・金融部門・農業部門においても、自分にとどまり、自分をつらぬいている。これだけみると、資本は絶対的に自由であり、自分の思い通りにふるまっているように思われる。その意味では資本の強さが考察されているのである。だがマルクスの弁証法はそれだけにとどまらない。資本を放置しては解決できない矛盾、それどころか資本そのものを否定する矛盾をみているのである。ここにヘーゲル弁証法との違いがある。

マルクスの矛盾は事物自体のうちにある事物自体を減ぼす矛盾である。この矛盾はなによりも第3部第3篇〈利潤率の傾向的低下の法則〉で展開される。それは肯定的理解のうちに否定の理解をみる、というマルクスの弁証法の最適例である。

利潤率 = 剰余価値 / 不変資本 + 可変資本、この式において分母の不変資本が大きくなれば、利潤率が低下するのは当然のことである。そして、生産力の発展はなによりも不変資本の増加によ

ってなされる。「可変資本に比べての不変資本のこの漸次的増大は……必然的に一般的利潤率の段階的下落をもたらさざるをえない」（⑨p. 363）資本の歴史的使命である生産力発展が、資本の目的である利潤の増大を妨げるのである。よかれと思ってやるのが、すべて裏目に出てしまうのである。これが利潤率の傾向的低下の法則である。

このような矛盾はヘーゲルのものではない。たしかに有論では革命的な矛盾が論じられている。量的変化が質的变化をひきおこし、有が無になり無が有になり、あるものが他のものに移行する、というのは革命的である。とりわけ冒頭の「有と無」では、ヘーゲルの矛盾はマルクスのそれに近い。しかし、本質論へ移行すると、そこでは移行するのは現象であって、その根底に永遠の本質が存在する、ということになってしまう。

利潤率低下の法則はただ一筋に進む、というものではない。それは反対に作用する諸要因が、この法則の貫徹を妨げているからである。そこで次のような場合が指摘されている。労働の搾取度が增大すると分子の剰余価値率が大きくなる。また、労賃が価値以下に引き下げられれば分母の可変資本部分が小さくなる。相対的過剰人口の増大も同じ結果をもたらす。さらに、不変資本そのものの諸要素の低廉化もある。不変資本の価値の低下は貿易によってももたらせる。さらに貿易は輸入食料価格を安くし、労賃の価値を下げ剰余価値率をたかめる。このように、利潤率低下をさまたげる諸要因がいろいろ存在する。それにもかかわらず、利潤の増大のために生産力を発展させる、そのために機械を中心にした不変資本を増加させる、という資本の衝動はやむことがない。そのことが利潤率を傾向的に低下させるのである。²²⁾

この法則は、傾向として貫徹するのである。時には上昇した低下し、全体としては低下していく。その過程で一時的にこの法則は反対事実によって否定されることもありうる。しかし、法則という主体は、自己を否定するさまざまな事実と格闘しながら、自己をつらぬくのである。さらに、この法則は外部にある事実との矛盾を引き起こすだけではない。資本主義の内部の矛盾を呼び覚まし展開していくのである。

内的な矛盾は生産の外的分野の拡張によって解決を図ろうとする。しかし、「生産力は、消費諸関係が立脚する狭い基盤とますます矛盾するようになる。」（⑨p. 417）資本は矛盾を生産の外部へ放り出すことで解決しようとする。しかし資本内部で生産力は狭い消費と矛盾し、価値の増殖、生産資本の増殖という目的が社会的生産力の発展という手段と衝突する。資本を減らすものは、資本の外部にあるのではなく、資本の内部に、その中心部分にある。したがって、「資本主義的生産の真の制限は、資本そのものである」（⑨p. 426）ということになる。この結論こそ、マルクスの革命的弁証法の真髓である。

3 剰余価値論・蓄積論、恐慌論、物神性論・物象化論にみる肯定と否定

『資本論』には、資本についての多くの考察が含まれている。さまざまな特殊理論、個別理論が見られるけれども、そのなかでもっとも重要な、普遍的な理論はなにか。それは、①剰余価値論・資本蓄積論、②恐慌論（矛盾論としての）、および③物神論・物象化論である。資本論の基本理論・基本内容といってもいいキーワードである。ごくおおまかに①は第一部、②は第二部、③は第三部に対応しているといえるだろう。しかし、第一部にも矛盾や物神性があるし、第二部にも剰余価値や物神性があるし、第三部にも剰余価値や恐慌の叙述がある。この3つの理論は『資

本論』全巻をつうじて展開されていると考えるべきである。

この基本理論には、資本家からみて肯定的なもの（資本の強さ・長所）と否定的なもの（資本の弱さ・弱点）がある。もちろん労働者にとっては逆の作用をする。

① 《剰余価値の理論》労働者が否定的理解をする剰余価値の生産は、資本にとっては肯定的に理解すべき事柄である。資本蓄積の法則は、資本家の側からは肯定的に、自分に有利に見えるのである。資本の蓄積は、他の側に貧困の蓄積を生じさせる。同じ法則を労働者の側から見れば貧困化の法則である。

② 《矛盾の現れ、恐慌》マルクスは、資本主義では恐慌は不可避であると考えた。恐慌の可能性はすでに商品生産のうちにも潜んでいる。資本主義生産にはさらにいろいろな恐慌の可能性が潜んでいるが、なかでも生産と消費の不一致が直接恐慌に繋がる可能性である。これらの可能性を現実性に転化させるものがあり、それが可能性を現実性に転化させる。2008年の世界恐慌では、サブプライムローン等の債権を組み込んだ金融商品の投機の破綻が、それまでに存在していた可能性を現実の恐慌に転化させた。

恐慌は不況であり、デフレでもあるので、資本家にとって困った事態である。反対に、好景気で商品が飛ぶように売れるのは、資本家にとって極めて好ましいことである。他方で、マルクスは、恐慌は資本主義の均衡化作用であり、資本主義が自らを維持し再生産をおこなうことを可能にする作用であると考えた。「世界市場恐慌は、ブルジョアの経済のあらゆる矛盾の現実的総括および暴力的調整としてつかまねなければならない」（全集26 II p. 689）恐慌は矛盾の調整であるから、この意味では、資本家に好ましい現象である。電気が過剰に漏電するとヒューズがとんで、発火するのを防ぐ調整装置のような面をもっている。生産と消費を一致させ、資本の再生産を可能にする資本制の安全弁として作用するから、資本にとっては肯定すべき事柄である。しかしヒューズとちがって資本の調整作用は労働者にとってきわめて過酷な調整である。過剰労働力として切り捨てられ、失業者に転落する。当然労働者にとっては否定的現象である。「すべての現実の究極の根拠は、依然として常に、資本主義的生産の衝動と対比しての、すなわち、社会の絶対的消費能力だけがその限界をなしているかのように生産諸力を発展させようとするその衝動と対比しての、大衆の貧困と消費制限である。」(⑩ p. 835)

恐慌は労働者を失業者にし、貧困にするが、反対に、その恐慌を生みだしたものは、労働者の貧困である。たんなる因果関係ではなく相互作用であり、さらに、ヘーゲルのいう「力と発現」(p. 171) であり、「外的なものとの内的なもの」である。貧困・消費制限という内的なものが恐慌として発現したのである。だから「内的なものは根拠です。」(p. 173) ということになる。

今度は当然、恐慌は労働者をはじめ多くの人々に疑問と怒りをもたせ、闘争にかりたて、資本主義を揺るがしていくだろう。そのことは資本家にとって否定的事象である。肯定が否定に、否定が肯定に転化するのである。

以上の①剰余価値・資本蓄積 ②恐慌については、ここではこれ以上論じない。本稿は、『資本論』第3部をおもな対象にしているのので、以下、第三部の主要内容を物神性・物象化論の視点から論じたい。

③ 《物神性・物象化》資本家は剰余価値の本質を労働者には知られたくない。資本家にとって都合なことには、資本主義的搾取がそのまま現象しないで、覆い隠されることである。その

ことを可能にするのが、資本の物神性および物象化である。物神性論と物象化論との違いであるが、物神性論は認識上の問題であり、見誤り、取り違えである。したがって、現象にとらわれずに本質を見抜く科学をわがものにすれば、物神性は消えてなくなる。他方、物象化は、生産関係が物象（物件）の關係に転化したもので、たんなる認識ではなく客観的な物件である。物象化を生じさせる資本主義の客観的現実を変革しなければ消滅しない。両者はふかくつながった理論なので次にまとめて論じることにしたい。²³⁾

A 利潤，平均利潤

剰余価値は利潤へ転化する。剰余価値の発生源である可変資本とだけ比べたものが剰余価値であるのにたいし、資本全体（可変資本+不変資本）とくらべた剰余価値が利潤である。「利潤は剰余価値の転化した形態であり、剰余価値の源泉とその定在の秘密とを隠蔽し湮滅する形態である。」（⑧p.79）資本家にとって、可変資本と不変資本の区別はいつでもよいものであるだけでなく、「外観にまどわされていることが、彼の利益」（⑧p.72）でさえある。

ここまでは個別の資本を分析し、そこから普遍的な資本の本質を明らかにした。利潤はさらに平均利潤へ転化する。ここからは、資本の集まりを見て諸資本間の競争関係と協力関係をみる。それにともなって、価値は生産価格へ転化する。平均利潤と生産価格は価値と剰余価値をさらに覆い隠す。

「生産価格が、商品価値のすでにまったく外面化された、また、明らかに没概念的な形態だ」。（⑨339）そこではすべてがさかさまになって現れてくる。「総剰余価値の分け前を均等化する働きをするのではなく、利潤そのものを創造する……ように見えるのである」。（⑨p.360）資本の物神性がいっそうすすむのである。

ここまでは産業資本の範囲である。ここで生じた資本の物神性は、商業資本や利子生み資本が登場すると、資本の正体はいよいよ隠され、資本の物神性がすすんでいく。

B 資本の特殊化 商業資本と利子生み資本へ

利潤が商業利潤と利子へ転化することによって、資本の物神性はさらにすすみ、剰余価値の正体は、いよいよ隠されていく。

産業資本のはたらきの一部が自立したものが商業資本である。商業資本は価値も剰余価値も生まない。産業資本が生みだし、平均利潤の形で存在している剰余価値の一部を、商業資本が手に入れたものである。ところが商業利潤は、商品を実際にその価値よりも高く売ることから生じるように見える。

平均利潤はさらに、利子と企業者利得とに分裂する。そこで、産業資本の手に入れる利潤は剰余価値によってではなく、利子率によってきまるように見える。そうすると、機能資本家は、企業者利得を自分が手に入れるのは、資本の所有によるものではない、と思ひ込む。彼は、自らも資本を機能させるという「労働」をおこなっていると錯覚してしまうのである。彼には、剰余価値から生じた企業者利得は「監督賃金」や「指揮者賃金」のように見えてしまう。

賢明なケインズもこの物神性から免れてはいない。かれは『貨幣改革論』（1923）で、資本主義社会は3階級が構成しているという。三階級とは、投資家階級、企業家階級、労働者階級である。投資家は利子取得者に、企業家は機能資本家・企業者にほぼ重なる。彼は、企業者が「労働」をおこなっているのに、投資家は無機能的な資本家であるとした。これはケインズが利子と企

業家利得の物神性にとらわれていたからである。（しかし、彼の非難が不生産的な利子に向けられる限り、その主張は積極的な意味をもっている。かれは、利子生活者はその仕事を終えるとともに、消滅すべき過渡的な階級とし、その「安楽往生」を期待していた。）

「利子生み資本において、資本関係はそのもっとも外面的で物神的な形態に到達する。」(⑩ p. 663) 利子生み資本は、その名称どおり利子を生むように見える。ちょうど鶏が卵を生むように、資本という物が生みだした果実のような偽りの仮象をとる。

「いまや逆に、利子が資本の本来の果実、本源的なものとして現れ、利潤はいまや企業者利得の形態に転化されて、再生産過程でつけ加わる単なる付帯物および付加物として現れる。」(⑩ p. 665) 剰余価値の本流である企業者利得は支流のように、本来支流であった利子が本流のように見えてしまう。こうして「利子生み資本においては、資本物神の観念が完成されている」(⑩ p. 679) ということになる。

それだけではない、信用制度のもとでは架空（擬制）資本が登場する。貨幣にたいする支払い約束、すなわち信用を貸し付けることによって、金準備によって保証されていない擬制的貨幣資本が創造される。これを信用創造といい、無から有が生じたのである。信用創造と架空資本において、「利子生み資本一般があらゆる錯乱した形態の母」(⑪ p. 805) ということになる。²³⁾ 架空資本の歴史は古い。すでに1720年、イギリスに、預けたカネが1年で50倍になると宣伝した「誰にも何だか分からない、大きな利益を守るための会社」が設立されていた。信用制度は矛盾である。

「信用制度に内在する二面的性格——一方では、資本主義生産の動力ばね……を、巨大な賭博とベテンの制度にまで発展させ……他方では、あらたな生産様式への過渡形態をなすという性格」(⑩ p. 765) をもつことになる。資本を拡大し発展させる動力ばねという肯定面が賭博とベテンという否定面となる。他方で、信用制度は、株式会社と国民的規模での協同組合企業を拡大させる。株式資本は擬制資本の代表的な例である。この二つのシステムは、資本主義を否定して登場するアソシエーション（共同社会）の萌芽でもある、とマルクスは考えた。肯定の中に否定を、否定のなかに肯定を見たのである。

C 三位一体の定式

以上のように、資本の現象諸形態、つまり産業資本が特殊化した諸資本を叙述したうえで、マルクスはそれを総括した。第3部の最終章「諸収入とその源泉」である。諸階級の諸収入、賃金・利潤・商業利潤・利子・地代は、すべて生産過程において労働者がつくりだした価値・剰余価値が源泉である。ところが、こうした社会の本質を理解しない資本家や経済学者は労働——賃金、資本——利子、土地——地代という、「経済学的三位一体的定式」をつくりあげる。それは「魔法にかけられ、さかさまにされ、逆立ちさせられた世界」であり「偽りの外観と欺瞞、富のさまざまな社会的諸要素相互の自立化と骨化」であり「諸物件の人格化と生産諸関係の物件化」(⑬ p. 1453) である。生産関係が物象（物件）の關係に転化し、物件が社会的登場人物、主役となる。同時に物件がただの物として幻想をかけめぐらせる世界があらわれる。それは、生産当事者にとって、彼らを支配する自然法則として現れる。

これは資本家たちの日常的諸観念であり、これを一見理論的に表現したものが俗流経済学である。「この定式は、同時に支配的階級の利益にも一致する。というのは、この定式は、支配諸階級の所得の諸源泉の自然必然性と永遠の正当化とを宣言し、一つのドグマに高めるものだからで

ある。」(⑬ p.1454) だから、資本家たちはこの定式に「すっかりわが家のくつろぎを感じる」のである。労働者だけでなく資本家も幻想にあざむかれている。しかし資本家はそのことが彼らの利益にかなっているため、苦痛ではなく、くつろぎすら感じるのである。したがって物神性・物象化も資本家にとって肯定すべき事柄であり、資本の強さでもある。

おわりに 4つの課題への一定の回答

以上で、ヘーゲルの弁証法の特質、マルクスがヘーゲルから学んだこと、マルクスとヘーゲルとの差異、マルクスの否定の弁証法について述べてきた。それをふまえて、「はじめに」で提起した4つの問題について、私見を述べたい。

① 有・本質・概念の展開と普遍・特殊・個別の展開、研究過程と叙述過程

マルクスはなぜ、『資本論』の方法として、普遍・特殊・個別を重視し、有・本質・概念をいかなかったか。それは彼が方法を考える時に、研究の方法でなく叙述の方法を問題にしたからである。マルクスが方法という場合も、それは研究ではなくて叙述方法である。マルクスの方法として先に掲げた「研究の仕方と叙述の仕方」とともに重要な文章は、「上向の道と下向の道」である。人口のような実在的で具体的なものから始めて抽象的なものにすすんでいく下向が正しいことのように思われるが、これはまちがいだ、とマルクスは書いている。上向の道、到達した抽象的なものから「ふたたび後戻りの旅を始めて、最後にはふたたび人口に到達することもできるであろう。」「このあとのほうのやり方が、明らかに、科学的に正しい方法である。」(全集⑬ p627-8) 科学的に正しい方法は抽象から具体だというと、具体から抽象は正しくないのか、といわれそうだが、ここで問題にしているのは叙述方法である。叙述方法だといわずに「方法」とだけいっているのは不正確な表現ではある。ただ、これは『経済学批判への序説』の「経済学の方法」として書かれたが当時は発表されなかった。しかし、マルクスの方法を考えるうえで必読の文献である。ここで、研究過程は下向の道であり、叙述過程は上向の道である。

② 全体のカテゴリーと部分のカテゴリー

この問題は①を前提にし、それと関連している。

研究方法としての有・本質・概念と叙述方法としての普遍・特殊・個別を、反対方向にあるプロセスとして同等にあつかえるのか。

論理学全体の体系である有論・本質論・概念論という大きな展開と、概念論の小項目である〈A 主観的概念〉、そのなかの小項目①概念そのもの、そのまた小項目である、普遍・特殊・個別とを対等なプロセスとしてあつかえるか、という問題がある。その問いには次のように答えられるであろう。

万物に神が宿るというスピノザの汎神論のように、論理学の小項目のなかにも、大きな論理が宿っているのである。だから、小項目のなかにも、体系全体に照応した論理展開がある。普遍的な大項目のなかの小項目は特殊であり、しかるべき位置におかれ、全体にとって欠かせない意味をもっている。同時に、特殊的な項目のなかにも普遍的な内容をもっている。したがって、有・本質・概念と普遍・特殊・個別とを等値することは、マルクスにあっては不自然ではない。

同じことは、有論冒頭の有・無・成の弁証法についてもいえる。これはヘーゲル弁証法の白眉であり、論理学の縮図ともいってよい概念である。あるいは、論理学の他の部分全体に匹敵するといってもいいほどの重要な概念である。しかし、項目番号もついていない小項目である。

ヘーゲルは、普遍と特殊を機械的に区別し、外的な比較で両者を関係させるのは「下位概念と同位概念」（文庫 下 p.133）だという。つまり、普遍は上位で特殊は下位で、両者は同じ位ではないというのは形式的な見方である、両者は同一なのだという。大きいとか小さいとか、広いとか狭いとかいう量的な関係ではなく、内容的に同じだということである。

③ マルクスの『要綱』では第1部—普遍、第2部—特殊、第3部—個別となっている。しかし、私は、『資本論』の体系を見るかぎり、第1部—普遍、第2部—普遍から個別のつながり、第3部—普遍から特殊であると考えてきた。

第2部はたしかに、生産過程から流通過程へすすんでいる。両過程とも資本主義的生産過程の二つの特種な側面である。ここは全体的には、普遍から特殊への展開である。「流通過程にあるこの機能が、一般に、ある特殊な資本の特殊な機能が自立化され……固定化される限りで商品資本は、商品取引資本、または商業資本になる」（⑨p.456）つまり、特殊な機能が自立化して特殊な商業資本になったのである。だから、第2部はたしかに全体として普遍から特殊といってもいいと思う。

ただし、第1部および第2部の第1篇「資本の循環」と第2篇「資本の回転」から第3篇「総資本の再生産と流通」への移行は、普遍から個別がつながった総資本という総体への移行である。第2部の表題が「資本の流通過程」となっているけれども、生産過程と流通過程の一致がここでの課題なのである。両者の一致は生産と消費の一致でもある。第2部で書かれているのはそこまでである。書かれずに終わった後半部分では生産と流通は一致しない。そのさいに、無制限な生産が狭い消費の枠をこえて、過剰生産が生じ、恐慌にいたる。したがって流通という舞台ではあるけれども、主役＝主体は生産過程の産業資本である、といってもいいのである。ただ、第2部は「資本の流通過程」というタイトルがついているので、第2部は特殊といってもいいと思う。

しかし、第3部が個別だというのは、どうだろうか。

たしかに、第3部には、平均利潤の前提として個別的な資本が登場する。しかし、そこへいくまでには、まず普遍から特殊への歩みがある。まず剰余価値は普遍であり、利潤は特殊である。利潤は平均利潤に転化するが、平均利潤も特殊である。ただしその際、個々の個別資本が集まって平均利潤の前提にはなっている。たしかに個別資本自体は特殊ではなく個別である。しかし個別資本それぞれは平均されて意味をもつわけで、個別資本自体にとどまっていたら、平均利潤論の課題にはこたえない。

さらに、産業資本から商業資本は普遍から特殊へ、である。利子生み資本も、資本主義的土地所有も特殊である。それでは、なぜ、『要綱』には第3部＝個別とあるのか、といわれれば、それは要綱のプランどおりには『資本論』が実現しなかった、というべきだろう。

たしかに、第2部にも普遍・特殊は見られるし、第3部にも、普遍・個別はある。しかし、『資本論』の基本的内容についての方法を問題にするなら、第1部 普遍、第2部 個別のつながり、第3部 特殊、が適切であると私は考えてきた。

しかし、『資本論』は有・本質・概念の論理と普遍・特殊・個別・の論理が、全体に、いたる

ところでつかわれている。この個所のこの部分がこの論理に相当するとはいえないのである。第何部はこの方法、という表現は誤解をあたえる。誤解を与えないためには、『資本論』全3部に論理学全体の弁証法が適用されている、というべきである。ヘーゲル論理学（もちろん肯定的な側面のみ）を普遍とすれば『資本論』は特殊だからである。

以上、ヘーゲルとマルクスとの関係を考察してきて次のことが明らかになる。対になったヘーゲル論理学とマルクス『資本論』との同一性と差異をあきらかにすることによって、ヘーゲルがよくわかり、マルクスもよくわかる、ということである。ヘーゲル理解とマルクス理解の間を「交互作用」の見地から見るべきである。交互作用は「原因と結果の関係のもっとも近接した真理」（文庫 下 p.113）なのである。

④ これまでの研究は、論理学の概念論が重視されてきた。しかし概念論は基本的に肯定的理解の弁証法である。否定的理解の弁証法は有論である。有論をもっと重視すべきだと考える。合わせて、本質論の重要性も強調したい。ここで論じられたカテゴリーをマルクスは縦横にもちいている。なによりも、表面的な現象の奥に隠された本質を見抜く科学的精神が、物神性・物象化の仮象を曝露している。有・本質・概念は一体としてその全体をとらえなければならない。

注

- 1) それは次のようなものである（ここでは、今回のテーマと直接つながる第1部についての個所だけを紹介する）。第1部では、まず、ヘーゲル論理学と「資本」の方法の関係についての、これまでの諸説の整理がなされる。①『論理学』からみた『要綱』と『資本論』（見田石介）、②『要綱』からみた『論理学』（内田弘）、『論理学』からみた『資本論』（武市健人）である。

「内田氏と武市氏はヘーゲル論理学とマルクスの著書との巻・章ごとの対応関係をみる。武市氏は『資本論』第1巻（資本の生産過程）を本質論に、第2巻（資本の流過程）を有論に、第3巻（資本の総過程）を概念論にそれぞれ対応させた。また、内田氏は『要綱』の貨幣章は有（存在）論に、資本章は本質論にそれぞれ照応しているとした。」

だが、角田氏はこのような対応・照応関係は正しくない、流過程や貨幣章でも、有的認識に止まらず、本質的認識と概念的認識が用いられている、という。見田石介氏は、『資本論』では、展開の方法として、概念論の普遍・特殊・個別の弁証法が用いられている、とした。角田氏は見田氏のこの方法を踏襲している。それは『要綱』でマルクスが『資本論』の第1部＝普遍、第2部＝特殊、第3部＝個別というプランをたてていたからである。見田氏の『資本論の方法』（1962）は『資本論』だけではなく『要綱』をもふまえていた。だが、当時高木幸二郎訳の翻訳書は出ていたものの、その研究は多くはなかった。メガの刊行以来の『要綱』研究の成果をとり入れたことが、類書をこえる本書のメリットになっている。（『経済』2006年3月号、No.126）

- 2) マルクス『資本論』とヘーゲル論理学との関係について、ヘーゲルの図式によって『資本論』を理解するというやり方を久留間駿造氏は批判している。氏は「資本論のどこの部分はヘーゲル論理学の〇〇論にあたり、どこの部分は××論にあたる、といったふうの方法論」や、「ヘーゲルを振りまわしながら、さて具体的に『資本論』のいちいちの個所について、マルクスが何を問題にし、それをどのように解決しているかというようなことは、あまり考えてみようとしなかったり」するような風潮をいましめておられるが、今日においてもころすべき警告である。（レキシコンの葉②）
- 3) ヘーゲル哲学の革命的内容を最初に見抜いたのは、ベルリン大学で学んだハインリッヒ・ハイネであった。ハイネがマルクスと知り合った1844年以降、彼は11編の『時事詩』をつくった。そのひとつ

「DOKTRIN 学説, 主義」という詩でヘーゲルと革命を称えている。

Schlage die Trommel und fürchte dich nicht,
 Und küsse die Marketenderin!
 Das ist die ganze Wissenschaft,
 Das ist der Bucher tiefster Sinn.
 Trommle die Leute aus dem Schlaf,
 Trommle Reveille mit Jugendkraft,
 Marschiere trommelnd immer voran,
 Das ist die ganze Wissenschaft.
 Das ist die Hegelsche Philosophie,
 Das ist der Bucher tiefster Sinn!
 Ich hab sie begriffen, weil ich gescheit,
 Und weil ich ein guter Tambour bin.
 太鼓を打ち鳴らせ, 恐れるな, / 酒屋の女にキッスしろ!
 これが学問の全体だ, / これが書物の深い意味だ。
 人々を眠りからたたき起こせ。/ 太鼓を打って若い力でたたき起こせ。
 太鼓をたたき, いつも先頭で前進するのだ。/ これが学問の全体だ。
 これがヘーゲル哲学だ。/ これが書物の深い意味だ!
 私はそれらを理解した, 私が賢く / りっぱな鼓手だから。

- 4) ジャック・ドント “Hegel en son temps” (邦訳『ベルリンのヘーゲル』花田圭介完訳 未来社)。
 ヘーゲルが永らく反動的・体制的な思想家だという謬説に反論し, 彼が進歩的な思想・理論を持っていたことを手紙や証言によってあきらかにしている。ヘーゲルをプロイセン国家の擁護者にしてしまう論拠は『法の哲学綱要』の一定のパラグラフ (310) である。しかし, 彼の全著作と手紙と行動を検討すれば, 彼は民主主義者であった, とドントはいう。
- 5) フランツ・メーリンクは “Geschichte der Deutschland” (邦訳『マルクス主義の源流』栗原祐訳, 徳間書店) に書いている。「全世界史上, 17世紀および18世紀のドイツの諸侯ほど, 長い間精神と力に乏しく, 人間の背徳では途方もなく豊富な階級はおそらくなかったであろう。恥も外聞も忘れて墮落した彼らはあらゆる罪悪のなかにのたうちまわった。外国と同盟を結びうる君主の権利を彼らは濫用して, 臣下の肉と血とを火薬の餌食として売った。それは, 贅沢をみせびらかし, ばかげた贅沢をする手段を売るためだった。彼らはそうしたことによってフランス国王の向こうをはるつもりだったのである。」(邦訳書 p. 73)
- 開化的「大王」といわれたフリードリヒ II 世の君臨したプロイセンも例外ではなかった。「プロイセン国家は決して実際の君主制ではなく, また決して近代的階級国家でもなく, いっさいの権能をもつ貴族と未成年の都市と不自由な農民, という出生族籍によって三つに区分された中世的同族国家にすぎなかった。これはまさに封建的廢墟であって, これを封建的腐敗のうちに維持するために最も熱心周到に配慮したのは, ほかならぬフリードリヒ王その人であった。」(p. 77)
- 6) 「随処に主となる, 立つ処皆真なり」という思想は禅宗の道元の基本思想である。この考えは, ヘーゲルの「他者のうちで自己をつらぬく」とおなじである。この思想の果たす役割は二重である。第二次大戦中, 学徒出陣の大学生の少なからぬ人たちが, 道元の『正法眼蔵』を携えていった。どんな境遇にあっても自己を失いたくない, という積極的な思いがこめられている。しかし, それは, 状況に反抗することも, 体制を変革することもできない自分を納得させる, 消極的な思想でもあった。

7) ドイツ古典哲学はドイツ古典文学と軌を一にしている。ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの徒弟時代』(1821-29)は最初の教養小説といわれる。教養小説は主人公ヴィルヘルムが、自分の生きた時代と社会のなかで、さまざまな体験をつうじて自己を発達させていくプロセスを描いたものである。主観(主体)が客観世界の格闘をつうじて自己をゆたかに発展させ、真理に到達していくヘーゲル論理学・概念論のプロセスは哲学に翻案された教養小説である。教養小説はその後、19世紀ドイツ文学の主流となった。

ドイツ教養主義の代表作の一つといわれる『緑のハインリッヒ』(1854-55)はゴットフリート・ケラーによって書かれた。主人公ハインリッヒは運命に翻弄され苦闘し、故郷に帰る。それは国や自治体の中での市民としての自覚を深め発達していくプロセスでもあった。ゲーテの場合は個人の完成であるが、フォイエルバッハから直接講義を聴き、その影響をうけたケラーは現実主義的な、社会的な教養主義であった。

トマス・マン『魔の山』(1924)の主人公、単純な青年ハンスは教養を求めて旅に出る。彼は山上の療養院でいろいろな人物に出会い出会う。とりわけ、ブルジョアの啓蒙主義者・ユマニストのイタリア人と、ブルジョア社会への憎悪に満ちたロシア人が彼にかかわる。前者は生命の礼賛者、生の肯定者であるが、後者は自死して果てる過激な人物である。対立したエラスムスとルターを20世紀に再現させたともいわれている。この悟性と「弁証法」との対立のなかで、ハンスは両者を止揚し、その中間の理念を見出す。西欧ブルジョア社会に反発し、共産主義の理念と倫理性には深い敬意を払いながらも、スターリン治下の現実のロシアには住み得ないと語ったマンの認識とかさなっている。

8) 本稿の最重要のキーワードであるので、『小論理学』の本文を挙げておきたい。

「普遍性は、その被規定性における自己自身との自由な同等性であり、特殊性という被規定性のなかでは普遍的なものは濁らされることなく自己自身に等しいあり方を保ち、そして個性性は、普遍と特殊性という二つの被規定性の自己の内への反照であって、この、自己との否定的一体性は即自かつ対自的に規定されたものであると同時に、自己と同一的なもの、あるいは普遍的なものである。」(全集1 p. 410)

つまり、普遍は特殊において普遍自身と同等であり、個性は普遍と特殊が自分のうちに反照したものである。あきらかに三者が同一であることが、ここでも強調されている。

9) 全体意思 (volonté de tous) と一般意思 (volonté générale) との相違について、ルソーは『社会契約論』に書いている。この場合、générale は一般とも普遍とも訳せるので普遍的意思といってもよい。

「全体意思と一般意思のあいだには、時にはかなり相違があるものである。後者は、共通の利害だけをこころがける。前者は、私の利益をこころがける。それは、特殊意思の総和であるにすぎない。しかし、これらの特殊意思から、相殺しあう過不足をのぞくと、相違の総和として、一般意思がのこることになる。」(岩波文庫 p. 47)

ところが個別については、ルソーは特殊の場合のような弁証法的なとらえ方はしていない。「われわれの各々は、身体とすべての力を共同のものとして一般意思の最高の指導の下におく。そしてわれわれは各構成員、全体の不可分の一部として、ひとまとめとして受けとるのだ。」(Ibid. p. 31) ルソーの場合は、一般と個とは数的な関係であって、個人は最高の一般意思の指導のもとにおかれる。ヘーゲルのいうような一般と個の同一性はないし、個は自立的でもない。ルソーの一般意思は全人民が主権者である直接民主主義といわれているが、ロベスピエールの独裁につながる面もっていた。ルソーにおいて一般意思と個人の意味は同一ではない。(Ibid. p. 129)

10) 普遍・特殊・個別について、ヘーゲルとマルクスとは基本的に大筋では同じであるが、次のような違いがある。ヘーゲルは「普遍的なものは自分のなかに特殊なものをふくみます。」という。とこ

ろが、マルクスにあっては、普遍的なものは、それ自身が特殊なものとして存在している。資本という普遍は産業資本という特殊な資本として存在するのであって、資本一般というものは考えない。ヘーゲルでは、普遍から特殊へ、であるが、マルクスでは普遍＝特殊から特殊へ、である。

- 11) 普・特・個の理解は、唯物論哲学者にあってはきわめて不十分である。要するに、弁証法的ではなく、形式論理的な理解なのである。最近出版された両角英郎『宗教・唯物論・弁証法の研究』には、その源流がローゼンターリ編『カテゴリー論』にあることがあきらかにされている。弁証法だといながら、特殊とは個別にたいしては普遍、普遍にたいしては個別、というような相対的な関係を問題にしている。ここで普遍はたんなる共通性にすぎない。普遍－特殊－個別の例として、植物－樹木－針葉樹などを掲げるといような通俗的理解であり、形式論理学そのものである。

なお、ローゼンターリといえば、『資本論の弁証法』という著書がある。弁証法の定式やカテゴリーをならべ、これに『資本論』の該当箇所を当てはめていくという叙述で、そこには『資本論』そのものの分析がない。

- 12) 形式的推理には、正しいものもあるけれども次のようなこじつけもある。日本は市場経済である、市場経済は競争と自己責任である、ゆえに日本社会は競争と自己責任の社会でなければならない、という単純な推理が、新自由主義正当化の理屈である。
- 13) たとえば果物のばあい、桃の種は普遍＝特殊であり果実は特殊である。ブドウの房、ザクロは普遍であり束になって実っている果物ひとつひとつは自立的な個別である。音楽グループでも、嵐のリーダー、大野智は特殊であり、彼なしには嵐はない。他方、AKB48の構成員はそれぞれ個別である。前田さんが抜けてもAKB48はAKB48である。かりに、EUからフランスあるいはドイツが脱退すれば、EUはEUでなくなる。フランスとドイツとは普遍EUのなかの特殊だが、個別のギリシャが抜けたとしても、おおきく傷つくとはいえず、EUは依然としてEUである。特殊か個別かという問題はもちろんどちらに価値があるか、というようなことではなく、普遍の中に占める位置と役割によってきまる。このばあい「個別的なものはさらに主体として表現される」というヘーゲルの指摘はきわめて重要である。個別の国々は主体として主権国家である。大国が小国の主権をふみにじれば、普遍的共同体は崩壊するだろう。かつての社会主義体制は、ソ連が主体的な小国の主権を踏みじったことによって崩壊した。いま普遍＝特殊のアメリカが個別であるアジアの国々の経済的主権を踏みじろうとするものがTPPである。

- 14) 個人こそ他のもの手段になってはならない、目的そのものである。これは近代思想、とりわけカント哲学の根本思想である。人類を普遍とすると個人・自己は個別である。ところが、このかけがえない個人は無数に存在し、しかも限られた命しか持たないということは、たいへんな矛盾である。中世においてのように、不滅の神があらゆるものを意味付け支配する、と想定するならばこの矛盾は生じない。

この個人が互いに無関係なバラバラの存在であっては、とても至高の存在ではありえない。そこで、個人と共同体、個人と社会、個人と国家という問題がホップズらしい近代の思想の根本問題になる。

しかし、普遍的人類と個人の個人はなかなかつながらない。キェルケゴールは『死にいたる病』で人類と個人の分裂を考察する。死にいたる病とは絶望のことである。かれは、有限性つまり個別と、無限性つまり普遍との関係のもとに見られる絶望についていう。「人間はもはや現実的なものに対して感受性を動かすことなく、むしろ非人間的な仕方たとえば抽象的な人類一般といったふうなあれこれの抽象体の運命に多感な思いを注ぐことになるのである。」(岩波文庫 P.47 斎藤信治訳)

ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟たち』の長老ゾシマは、人類一般のためには十字架でも背負うが、個々の人間は愛せない人物について語る。この人物においても現実的・個別的なもの

的・個別的なものが分裂している。

ヘーゲルの普遍と個別は分裂していない。ヘーゲルは『法の哲学』でもこの大問題を考察した。その第3部は、家族、市民社会、および国家からなる。注目すべきは市民社会においてコルポラツィオンを考察していることである。一種の共同体であり、「家族と国家との間の人倫的な中間環」である。それは普遍と個人をつなぐ媒介となっている。（尼寺義弘訳『法の哲学講義』晃洋書房参照）

- 15) 山中伸弥教授とジョン・ガードン博士による「成熟した細胞を、多能性を持つ状態に初期化できることの発見」は、普遍と特殊の弁証法にも新しい課題を提起した。普遍から特殊という通常の展開にたいして、特殊から普遍へという逆方向の展開である。

ヒトもふくめた動物は1個の受精卵から体のすべての細胞、さまざまな臓器や組織の細胞をつくりだす。これが「分化」であるが、これまでは分化した細胞は分化前の状態に逆戻りはしないと考えられていた。ところが、ガードンは、一度分化した細胞でも核をとり除いた卵の中に入れるとあらゆる細胞に分化できることを明らかにした。ただ、この方法は卵を壊すという倫理上の問題がこのころ。

そこで、卵を壊さずに分化した細胞を初期化できるのがiPS細胞である。それはヒトの皮膚細胞などの体細胞に、初期化を誘導する遺伝子を導入して、体のさまざまな細胞に慣れる能力を獲得した細胞である。

このばあい、弁証法的には卵が普遍で、諸臓器や諸組織は特殊である。これまで、一方的に普遍から特殊へとされていたものが、特殊から普遍へと逆行することになる。ヘーゲルでは普遍から特殊への展開であるし、マルクスでもふつうは、産業資本から商業資本というように普遍から特殊への移行である。ただ、価値形態論においては、特殊から普遍へ展開している。

- 16) 『精神現象学』は意識からはじまる。意識の端緒は、感覚的確信である。そこから自己意識、理性、精神（人倫、教養、道徳性）、宗教、芸術をへて、「絶対的な知ること」にいたる。それは「主体について知ることをもって、実体について知ること」であり、「精神の最後最終の形態である」。「絶対的な知ることとは自分を精神の形態において知るところの精神であり、言いかえると、概念的に把握するところの知ることである。」（全集5下巻、金子武蔵訳 p.1150）

- 17) かつてよく読まれた毛沢東の『実践論』は『精神現象学』に、『矛盾論』は『論理学』に対応している。もちろん、ヘーゲルの内容豊かな展開にくらべれば、あまりにも簡略であり、一面的である。さらに「感性から理性へ」ということで、悟性の段階がない。「論理学」のレベルでいうと、本質段階と概念段階がいっしょになって第二段階になってしまっている。そのため、すべてが弁証法になってしまい、分析を駆使する悟性、本質的認識が軽視されている。

なお、中国のマルクス主義には河上肇の著書が大きな影響をあたえた。河上の『資本論』理解には、弁証法を強調するあまり分析の意義が軽視されている。「商品の二面的性格」を「商品の二者闘争的性格」と訳したように。もっとも、弁証法主義は戦前戦後をつうじて日本の唯物論哲学のあいだで、広く信じられていた。分析的な形式論理学はブルジョア的、弁証法はプロレタリア的、という説が支配的であった。この思い込を批判し、『資本論』に分析が駆使されていること、弁証法の土台には分析がなければならぬことを強調したのが、見田石介『資本論の方法』（1962年）であった。

- 18) マルクス理論の特徴は理論と現実がしっかりつながっていることである。抽象的な理論と具体的な現実との往復運動がある。つまり、経済現象相互の関連を観察するととどまらず、現象の背後にかくされた本質的な法則を究明しているのである。混乱と停滞と危機にある資本主義の現実をつらぬく本質解明の理論である。他方、この点において、新古典派もケインズ経済学も無力である。日本近代経済学の泰斗といわれる猪木武徳氏はいう。「経済理論は筋道をたてて説明するのに便利だが、現実社会に起きる、きわめて複雑な現象のすべてを解決できる完璧な処方箋は描けません。」

- 19) 愚鈍な経済学者や資本家と違って、賢明な資本家は経済現象だけに目を奪われることなく、その本質を見ている。アメリカ金融界の大御所、UBS銀行顧問のジョージ・マグナス氏は「現代の世界経済危機の本質を知りたいければ、マルクスを読め」という。マグナス氏が注目する『資本論』の理論は次のふたつである。「一方の局における富の蓄積は、同時に、その対極における……貧困……の蓄積である。」「すべての現実の恐慌の究極の根拠は、……生産諸力を発展させようとするその衝動に対比しての大衆の貧困と消費制限である」。前者は第1部の結論であり、後者は第2部の結論になるべき句である。これを指摘したことはマグナスの慧眼である。マルクスは現象の内に隠された本質をみて、対になった概念をあきらかにし、現実中存在する対立物を明らかにしている。マグナス氏の認識は十分に本質論的段階に到達している。
- 20) 論理と歴史がそのまま一致するとする論理=歴史説を早くから批判したことは、見田石介の功績である。この説はのちに、「マルクスの方法のヘーゲル主義化」と、より正確に表現された。分析を軽視してすべてを弁証法で論じようとする「弁証法主義」に反対して、分析の意義を強調した見田説は、「ヘーゲル主義化」批判へと拡大・発展した。見田の立場にたって価値形態論を詳細に分析した著書が尼寺義弘『価値形態論』（青木書店 1979）である。
- 21) 個別をつうじてしか、普遍的なものは明らかにできない。最近も国会で、企業による労働者への退職強要を共産党議員が追求していた。その際、議員は日本IBMとNECの企業名をあげて追求した。これにたいして大臣は「個別の案件には答えられない」と答弁した。いつもどおりの官僚答弁である。考えてみれば、個別企業の解雇の具体的なやり方をつうじてしか、日本企業一般の過酷な解雇の状況は告発できないのである。
- 22) この法則は、技術革新が不変資本の価値を小さくするので成り立たないという説がある。しかし、資本主義の興隆期には厳然と存在していた。資本主義を絶対的な生産様式だと確信していたリカードでも、この生産様式が自分自身にたいして制限をつくり出すことを知って不安を感じていた。マルクスはこの法則を、たとえば資本蓄積の法則のように、誰の目にも見える形で存在しているとは考えなかった。マルクスはこの法則に反対に作用する諸要因をあげている。そのなかに「不変資本そのものの諸要素の低廉化」があげられている。たしかに現行価格のもとで費用を削減する技術革新という反対に作用する要因もあるだろう。しかし、この法則は自己を否定するものを克服してさらに内容ゆたかになっていくのである。「概念は他者のうちで自己を保持する」のである。だからこそ、「利潤率の傾向的低下の法則」とよび、この法則は傾向だとみたのである。法則に反対する事実、否定する事実があり、一時的には利潤率が上昇する局面もある。しかし長期的には傾向として法則が貫徹するのである。現代資本主義、国家独占資本主義においては、この法則に反対する諸要因はさらにふえている。なによりも、国家や自治体が企業にたいして至れり尽せりの財政支出をしているからである。だからこそ、莫大な設備投資を必要とし、独力では赤字経営になるはずの電力会社が莫大な利潤を生み出してきたのである。
- 現在、この法則は、反対に作用する諸要因の存在にもかかわらず、現実の日本資本主義を貫徹している。今、日本の家電メーカーは巨額の赤字をだし、「電気メーカー総崩れ」といわれている。鉄鋼メーカーもおなじである。もちろん、さまざまな理由があるけれども、根底には設備投資の巨大化による利潤率の低下がある。シャープが三重県亀山市に巨大な工場をつくり、テレビのアクオスの生産では成功した。このばあい、地元の雇用が増えるという口実で県や市から数十億の巨額の支援を受けた。援助金欲しさに最新の巨大工場を設置したのである。しかし雇用はほとんど増えず、工場設備だけが大きくなった。これがのちに利潤率低下につながるのである。亀山市で利潤増大に成功をおさめたシャープは堺市にも進出し、巨大な工場をつくったが、巨大な設備投資が災いしてこれは失敗した。柳の下にドジョウはいなかったのである。そしていま、株価も暴落し苦境に陥っている。従業員の間

にも不安がひろがり、募集した希望退職者1000人にたいして応募者は2960人、国内従業員の10%強に相当する。(11月20日)「今後研究開発の中樞を担う技術者が流失しかねない」と懸念されている。同じことがソニーでもパナソニックでも起きている。

この事態に直面した経営者は、家電・自動車企業に赤字が出たのは韓国・中国との競争に敗れたからだという。しかしその原因をつくったのは日本企業である。産業資本は、90年代以来、新自由主義に扇動され、すぐれた技術をもつ技術者や労働者を大量にリストラした。この人たちを高給で招聘したのが韓国や中国の企業である。サムソンなどは優秀な技術者を数千万円から一億円の年俸で厚遇した。韓国・中国のメーカーに負けてしまったのは、社員を粗末にあつかった日本企業の自業自得なのである。この際、可変資本を減らし剰余価値を増やしながら、工場設備という普遍資本が巨大化し、利潤率は低下したのである。巨額の内部留保も将来の設備投資にそなえたものであった。利潤率の傾向的低下の法則は日本資本主義に厳然と貫いているのである。

なお、不変資本の費用を削減する技術革新は製品の価格をも下げた。これはほんらい剰余価値を増やす要因であるが、デフレのもとでの過当競争は、価格を大幅に下げる。製品のコストを割る場合さえあり、剰余価値を小さくしてしまった。この場合は技術革新が遠回りをしながら利潤率低下の方向に作用するのである。

- 23) 利子生み資本の中心は銀行である。もともと銀行の利子は、安く借り高く貸すことから生まれた。貸し付け利子から預金利子を引いたものが「利ざや」で、銀行の収入の基本であった。貸し付けの利子総額から、借入の利子総額と業務経費（銀行労働者の賃金を含む）を差し引いたものが銀行の儲けである。現在では「利ざや」という基本的な収入だけではなく、多様な業務から莫大な収入を得ている。投資銀行（インベスト・バンク）は証券発行の業務をおこない手数料を得る。会社の合併や買収の仲介もおこない、金融工学を駆使して金融商品をつくりだしている。サブプライム・ローンのように債権を証券化するという業務は絶えず危険をとまなう。それによって4大証券会社は赤字をかかえ、リーマン・ブラザーズは破綻した。

金融テクノロジーによって世界貿易額の50-100倍もの巨額資金が運用されている。金融の世界には詐欺とペテンが蔓延している。最近ではAIJ投資顧問が、中小企業の年金基金を受託した70億円を騙し取った。

引用文献

表示のないヘーゲル小論理学の引用は、『ヘーゲル論理学講義 ベルリン大学 1831年』牧野広義・上田浩・伊藤信也訳

「全集」と表示した小論理学の引用はヘーゲル全集1『小論理学』真下真一・宮本十蔵訳

「文庫」と表示した小論理学の引用は岩波文庫『小論理学』松村一人訳

表示のない『資本論』の引用は、新日本出版社『資本論』

「全集」と表示したマルクスの引用は、大月書店 マルクス・エンゲルス全集

その他の引用は文中に記す